



Title	歴史書としての聖者伝：16-18世紀カシュガル・ホージャ家の伝記『タズキラ・イ・ホージャガーン』の翻訳を終えて
Author(s)	澤田, 稔
Citation	日本中央アジア学会報, 14, 27-28
Issue Date	2018-07-31
DOI	10.14943/jacas.14.27
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/88352
Type	article
File Information	JB014_004sawada.pdf



[Instructions for use](#)

公開講演

歴史書としての聖者伝

— 16～18世紀カシュガル・ホージャ家の伝記
『タズキラ・イ・ホージャガーン』の翻訳を終えて—

澤田 稔

カシュガル・ホージャ家と通称されるイスラーム神秘主義者（ホージャの尊称で呼ばれる）の一族は、中央アジア、サマルカンドにおけるナクシュバンディー教団の指導者マフドゥーミ・アーザムの子孫であり、16世紀後半に東トルキスタンに進出した。その後、同家はヤルカンドに拠るイスハーク派とカシュガルに拠るアーク派に分かれて対立したものの、それぞれ宗教的に勢威を確立していった。著述家ムハンマド・サーディク・カシュガリー（Muhammad Šādiq Kāshqarī）は清朝統治下の18世紀後半、イスハーク派の歴代指導者の行状を中心として『タズキラ・イ・ホージャガーン（ホージャたちの伝記）』（*Tadhkira-i khwājagān / Tadhkira-i hōjagān*）という書物をチャガタイ語（中央アジアのトルコ系文語）で書き上げ、同時代の記録は無論のこと、後世の史書も伝えていない貴重な情報を残した。

講演者・澤田は本書『タズキラ・イ・ホージャガーン』の写本に基づいてその日本語訳注をおこない、『『タズキラ・イ・ホージャガーン』日本語訳注』と題して『富山大学人文学部紀要』の第61号（2014年8月）から第68号（2018年2月）にかけて8回にわたり連載し、この度テキスト全文を訳し終えた。そこで本講演では、本書全体の構成と内容を整理したうえで、そこに含まれる情報の政治的側面を紹介するとともに、同書の持つ歴史書としての性格について考察した。『タズキラ・イ・ホージャガーン』はその書名に含まれる「タズキラ」という語が示しているように聖者伝のジャンルに入れられるが、濱田正美氏は東トルキスタンの聖者伝として、全くの空想の産物としての聖者伝と神秘主義的世界観に基づく事件史の聖者伝という二つの極端な違いのタイプ、そしてその両極端の中間に位置するタイプを指摘している。そのなかで、本書は事件史としての聖者伝、つまり歴史書としての聖者伝の代表であると言える。この伝記においては、聖者たちの宗教的な活動や奇跡的なエピソードよりも具体的な政治的事柄に主眼が注がれている。

本書で叙述される主要な地域は、タリム盆地の西半部、すなわちアクス、ホタンより西側、カシュガル、ヤルカンドにいたる地域である。16世紀初頭から18世紀半ばにかけてタリム盆地を統治、あるいは支配した国家は二つあった。すなわち、チンギス・ハーンの第二子チャ

ガタイの子孫が君主となりヤルカンドを首都としたモグール国と、17世紀の後半に天山山脈北方の草原地帯で形成された西モンゴル系オイラト族のジュンガル王国である。ジュンガル王国の英主ガルダンは1680年にカシュガル、ヤルカンドを攻略してタリム盆地の全域を支配下におき、その結果モグール国は滅亡する。そしてこの頃から、ジュンガル王国の宗主権下でカシュガル・ホージャ家がヤルカンドを中心にタリム盆地西半部を統治することになる。本書の叙述の大部分はこの時代のことを扱っている。なお、ジュンガル王国あるいはオイラト族は本書においてカルマクと呼ばれている。ガルダン以後、勢威をふるったジュンガル王国も18世紀半ばに君主位の継承をめぐり内紛が生じ、結局、1755年に清朝により滅ぼされる。その結果、ジュンガル王国の支配から解放されたカシュガル・ホージャ家は、二つの党派がそれぞれ独自の行動をとり、アーファーク派は清朝軍の援助を受け、イスハーク派からカシュガル、ヤルカンドを奪取する。本書は、アーファーク派の軍勢にヤルカンド郊外で追捕されるイスハーク派ホージャたちの悲劇的な結末で叙述を終えている。

『タズキラ・イ・ホージャガーン』の主眼は、その序文に述べられているように、あくまでもイスハーク派のホージャたちの功績を語ることであった。しかし、ホージャ・アーファークをはじめアーファーク派のホージャたちの活動についても叙述がおよんでいる。これは、イスハーク派の歴代ホージャたちの事績を時系列にまとめていくためには、アーファーク派のホージャたちにも言及する必要があるためであろう。ジュンガル王国の支配下におかれるようになった経緯は、ホージャ・アーファークの活動を抜きにしては語ることはできない。また最終的なイスハーク派の悲劇的な終焉も、アーファーク派とカルマクや清朝との結びつきを説明せねば理解できない。そして、ホージャたちの活動の重点が宗教的なものから政治的なものに移っていったことも本書の政治的側面に反映していると考えられる。ホージャたちの政治的な役割は、モグール国の滅亡後に特に強まったはずである。つまり、ホージャ家以外にジュンガル王国の宗主権下においてタリム盆地西半部のオアシス地域の政治を広域的に担当できる勢力はなく、ホージャに宗教指導者としてよりも政治指導者としての役割が強く求められたと思われる。本書が歴史書としての性格を強く持っているのは以上の理由からであり、それを書物としてまとめる力量が著述家のムハンマド・サーディク・カシュガリーにあったことも見逃すことはできない。

(富山大学人文学部)